

2019年11月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

釈迦牟尼世尊が説いたこと

1. 概要

(1) 資料

中村 元選集／第11巻『ゴータマ・ブッダ 一釈尊の生涯一』春秋社

増谷文雄著『阿含経典2』ちくま学芸文庫

庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社

(2) 主題

釈迦牟尼世尊は、何を目的として、どういう教えを説いたのか、学んでみたいと思います。

2. 仏教にドグマはない

(1) 仏教には特定の教義がない

中村 元博士は、「仏教そのものには特定の教義というものがない」（中村 元選集／第11巻「ゴータマ・ブッダ、春秋社、p.192）と指摘します。

(2) 特定の教義

① 「特定の教義」は、「ドグマ」とも呼ばれます。

「ドグマ」は、「特定の宗教、団体、流派における固定的で堅固な信条、信念」と定義づけられています。

② その宗教の開祖が感得した神の言葉などを根拠として、教えが生み出され、体系化されたものが、その宗教の教義（ドグマ）となります。

その宗教を信奉する人々は、その宗教の教義（ドグマ）に従って、物事を理解したり、考えたり、判断したり、行動したりします。

③ ドグマを持つ宗教は、次のようなことを言う可能性があります。

「この教え（ドグマ）を信じるなら、あなたをこの宗教の信仰者と認めよう」

「この教え（ドグマ）を信じないあなたは、異端である」

(3) 釈迦牟尼世尊の教え

庭野日敬師は、釈迦牟尼世尊が説いた教えについて、次のように述べています。

「釈尊は、神がかりになって一般の人に理解できないような神秘的なことをい�だされたものでもなければ、ひとりよがりの考えを押しつけられたものでもありません」（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.12）

これは、釈迦牟尼世尊の説法がドグマではないことを述べていると受け取ることができます。

3. 普遍の真理

(1) 普遍の真理に達する

庭野日敬師は、次のように続けます。

「釈尊は、『この世界とはどんなものか。人間とはどんなものか。だから、人間はこの世にどう生きべきであるか。人間どうしの社会はどうあらねばならないか』ということなどについて、長い間考えて考えぬき、そして『いつでも』『どこでも』『だれにも』当てはまる『普遍の真理』に達せられたのです」（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.12）

(2) 普遍

① 「普遍」とは、「例外なくすべてに当てはまること」を言います。

「普遍の真理」は、「いつでも」「どこでも」「だれにも」当てはまる真理です。

② 「だれにもあてはまる」ということは、「だれでも見つけることができる」、「だれでも理解することができる」、「だれでも活用することができる」ことを意味します。

すなわち、ドグマにはなり得ません。

4. 教えの多様性

(1) 教えを定式化しない

① 中村 元博士は続けます。

「ゴータマ自身は自分のさとの内容を定式化して説くことを欲せず、機縁に応じ、相手に応じて異なった説き方をした」（中村 元選集／第11巻「ゴータマ・ブッダ、春秋社、p.192）

② 定式化するとは、「誰に向かっても、同じ理論を、同じ言葉で、同じように説く」というようなことです。釈迦牟尼世尊は、そういうことはしませんでした。

③ 釈迦牟尼世尊は、「機縁に応じ、相手に応じて異なった説き方をした」のです。このため、説くたびに内容が異なってきたのです。

「釈迦牟尼世尊の教えは、説いた相手の数だけある」という人さえいます。

(2) さとりを推しはかる

① 中村 元博士は続けます。

「だからかれのさとりを推しはかる人々が、いろいろ異なって伝えるに至ったのである」（中村 元選集／第11巻「ゴータマ・ブッダ、春秋社、p.192～193）

② 教えを聞いた人は、自分が聞いた教えから、それぞれに釈迦牟尼世尊の悟りの内容を推測したり、体系化を試みたりしました。

このため後世に、いくつもの異なる教えが伝わることとなりました。

5. 法門

(1) 法門

- ① 仏教では、「教え」を「法門」と言うことがあります。「法門」とは、「法への入り口」というほどの意味でありましょう。
- ② 「四諦の法門」、「十二因縁の法門」、「八正道の法門」、「六波羅蜜の法門」、「十如是の法門」など、いくつもの法門があります。
- ③ 「法門」に入りますと、そこに修行の道があります。この道を実践することによって、修行の目的に向かうのです。

(2) 法門はドグマではない

これらの法門（教え）は、ドグマではありません。仏教徒であろうとなかろうと、これらの法門に入り、実践すれば、修行の目的に到達できる普遍的な理論だからです。

(3) 定式化された教えではない

これらの法門（教え）は、経文には一定の形式で記されていますが、定式化されているわけではありません。説明する人とされる人の関係のなかで、必要であれば、自由に言い換えることができます。

6. 安心立命の境地への道

(1) 帰するところは同一

中村 元博士は、「特定の教義がないということは、決して無思想ということではない。このようにさとの内容が種々異なって伝えられているにもかかわらず、帰するところは同一である」（同書、p.193）と指摘します。

「ただ一つの帰するところ」について、中村 元博士は「既成の信条や教理にとらわれることなく、現実の人間をあるがままに見て、安心立命の境地を得ようとするのである」（同書、p.193）と述べています。

すべての人々を、現実のなかで、安心立命の境地に導き入れることが、釈迦牟尼世尊の目的なのです。

(3) 理法の体得

中村 元博士は、次のように言います。

「それは実践的存在としての人間の理法(dharma)を体得しようとする」（同書、p.193）

人間は、行動することによって得たいものを得ることができるのです。

安心立命の境地を得たいと思うならば、どうしたら得られるかを知って、行動すればいいのです。その筋道を示してくれるのが「人間の理法」です。

7. 人間の理法

(1) 人間の理法は固定していない

中村 元博士は、次のように言います。

「人間の理法なるものは固定したものではなくて、具体的な生きた人間に即して展開するものである」（同書、p.193）

釈迦牟尼世尊は「機縁に応じ、相手に応じて異なった説き方をした」とありました。それは、ここにある通り、「人間の理法は、具体的な人間に即して展開する」からです。

同じ、安心立命の境地へ向かうにしても、人によって歩む道が異なっているのです。人によって、苦悩から脱出する仕方が異なるのであり、人によって、幸福を得る道が異なるのです。

(2) 千差万別の教え

『無量義経説法品』に次の一節があります。

「おおくの人びとの機根や、性質や、欲望の相(すがた)をしっかりと観察しなければなりません。人びとの機根も、性質も、欲望も千差万別ですから、それぞれの人に説く教えも、当然千差万別とならざるをえません」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.17）

「人間の理法」は、その人その人によって、異なっていることが示されていると思います。

8. 「法」が最高の権威

(1) 「法」が最高の権威

中村 元博士は、「法」について、次のように述べています。

「さとりを開いたのちに、釈尊は一つの確信に到達した。それは、〈法〉が最高の権威であるということである」（中村 元選集／第11巻「ゴータマ・ブッダ」、春秋社、p.193）

(2) 法を師とする

中村 元博士のこの指摘は、増谷文雄編訳『阿含経典2』（ちくま学芸文庫）掲載の経文「恭敬」を裏付けにしていると思います。

この経文には、正覚を得たばかりの釈迦牟尼世尊が、「自分はこの後、誰を師と仰いでいけばいいのだろうか」と考えたとあります。しかし、世間には師と仰ぐに足る修行者は一人もいませんでした。

釈迦牟尼世尊は思いました。

「とすると、わたしは、むしろ、わたしが悟った法、この法をこそ、敬い尊び、近づきて住するがよいであろう」（増谷文雄編訳『阿含経典』ちくま学芸文庫、p.481）

釈迦牟尼世尊は「法を師とする」という道を選んだのです。

こうして「法が最高の権威」という確信を持ち、それが後日「自灯明・法灯明」の説法となります。

9. 釈迦牟尼世尊が説いたこと

(1) 経文「申恕(シンサパー)」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、コーサンビー（橋賞弥）のシンサパー（申恕）林にましました。

その時、世尊は、その手にすこしばかりのシンサパーの葉をとって、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、汝らはいかに思うか。わたしが手にとっているすこしばかりのシンサパーの葉と、このうえのシンサパー林にあるそれと、いずれが多いであろうか」

「大徳よ、世尊がその手にとりたまえるシンサパーの葉はすくなく、このうえのシンサパー林にあるそれは多うございます」

「比丘たちよ、それとおなじように、わたしが証知して、しかも、汝らに説かざるところは多くして、説けるところは少いのである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 311～312）

(2) 説かないことは多く、説くことは少ない

釈迦牟尼世尊は、シンサパー林で、シンサパーの葉を数枚とると、修行者たちに向かって、釈迦牟尼世尊の手にあるシンサパーの葉と、シンサパー林にあるシンサパーの葉と、いずれが多いであろうかと問いました。

修行者たちは、世尊の手にあるシンサパーの葉は少なくシンサパー林のほうが多いと答えます。

これを受けて、釈迦牟尼世尊は、「私が証知して、しかも、あなた方に説かないことは、シンサパー林の葉のように多く、あなた方に説くことは私の手の中の葉のように少いのである」とおっしゃいます。

(3) 経文「申恕(シンサパー)」

「比丘たちよ、では、なにゆえに、わたしは、それらを説かなかったであろうか。比丘たちよ、それは役にも立たず、梵行のはじめともならず、厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃にも資することがない。そのゆえに。わたしは説かないのである」（同書、p. 312）

(4) 説かない理由

釈迦牟尼世尊が、多くを説かない理由は、修行の目的を達成するために役に立たないからです。

(5) 経文「申恕(シンサパー)」

「比丘たちよ。では、わたしは、何を説いたであろうか。比丘たちよ、〈こは苦なり〉とわたしは説いた。〈こは苦の生起なり〉とわたしは説いた。〈こは苦の滅尽なり〉とわたしは説いた。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉とわたしは説いた」（同書、p. 312）

(6) 釈迦牟尼世尊が説いたこと

釈迦牟尼世尊が修行者たちに説いたことは、四つの聖諦です。

これは苦である

これは苦の生起である

これは苦の滅尽である

これは苦の滅尽にいたる道である

(7) 経文「申恕(シンサパー)」

「比丘たちよ、では、なにゆえに、わたしは、それらを説いたであろうか。比丘たちよ、それは役に立ち、梵行のはじめとなり、厭離・離貪・滅尽・寂静・証智・等覚・涅槃に資するからである。そのゆえに、わたしは説いたのである」(同書、p. 312)

(8) 四つの聖諦を説いた理由

釈迦牟尼世尊が、修行者たちに、四つの聖諦を説いた理由は、修行の目的を達成するために役に立つからです。

(9) 経文「申恕(シンサパー)」

「されば、比丘たちよ、〈こは苦なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の生起なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の滅尽なり〉と勉励するがよい。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉励するがよいのである」(同書、p. 313)

(10) 勉励の勧め

釈迦牟尼世尊は、修行者たちに、四つの聖諦を勉励するように勧めます。

四つの聖諦を学び、実践すれば、修行の目的を達成できるからです。

10. 修行の目的に到達するために

阿含経に次の一節があります。

「わたし(釈迦牟尼世尊)は教えよう。わたしは法を説こう。教えられたるがごとく、そのごとくに行ずるならば、久しからずして、良家の子が家よりいでて出家の行者となれる、その目的である無上の梵行を、この現世において、みずから知り、証し、到達して住するにいたるであろう」(増

谷文雄編訳『阿含経典3』ちくま学芸文庫、p. 149)

釈迦牟尼世尊の教えのとおり実践すれば、修行の目的を達成することができるのです。